



開催レポート

勝興寺と
まちづくり座談会

vol.1



重要文化財に指定されている「勝興寺」。現在は修理事業の最中ですが、平成30年8月に本坊の一部を公開、平成33年には修理事業を完了し本公開となる予定です。そこで今回、特別に本堂や修理中の本坊を見学し、これからの伏木や、勝興寺を地域のために活かしていくにはどうすればよいかを参加者のみなさんと一緒に考える座談会を開催しました。

開催日：平成30年3月10日(土)

時間：13時～16時

会場：勝興寺 本堂

テーマ：伏木や勝興寺の魅力と課題

実施内容：

(1)本堂・本坊の見学

(2)全国の寺院の取組み事例紹介

(3)座談会形式による意見交換

当日は、地元住民を中心に150名を超える方々が参加されました。勝興寺や伏木のまちづくりへの関心の高さがうかがえます。

第1部

まずは、勝興寺や伏木の魅力について、その歴史やそれぞれの思い出も交え意見交換を行いました。地元の方や普段から関心の高い方でも知らないことが次々と語られ、会場は熱気に包まれました。

勝興寺は文化庁が復原修理に四半世紀もの間支援を続けているほど価値がある建物です。高岡に関心のある人は隣県の方でも「宝の山」と褒めてくれますが、そうではない人々には地元の方であってもそれほど評価されていないのが残念です。本堂は本山(京都・西本願寺)の阿弥陀堂に匹敵する構えで、書院などもよく遺していただいたと思いますね。本来のお寺の役割はもちろんのこと、文化遺産として活用していかないとはいけません。子供の頃はこのデカローソクの前で報恩講によく父に連れられてやって

きたものです。寺の年間行事をきっちりやれば、門信徒も増えていくことでしょうし、昔のように「ふっこはん」いこうと子や孫を連れていけるようになったらいいなと思います。今年(平成30年)10月27日、28日には茶道裏千家「淡交会」の大茶会が開催され、北信越5県から1,500人の会員が集い盛り上がることでしょう。勝興寺を知っていただき、せっかくの宝なので市民のみなさんとともにしっかりと守り活用していきたいと思っています。



多田 慎一 さん
(近世高岡の文化遺産を愛する会 会長)



加賀100万石の領地の中で、越中が70万石を占めていました。普通は70万石あれば、城が10以上ある規模ですが、1つしかない。富山の人々はほとんど侍の姿を見ずに暮らすという全国に類例のない藩政時代を生きてきました。金沢は城下町で全国トップクラスの消費文化がある。けれども高岡は、商人と職人の町でした。つまり、「庶民文化」が支えてきたという特徴があるのです。

勝興寺は浄土真宗の信者を一気に100倍ほどに増やした蓮如上人の開基と言われていますが、高岡市文化財審議会委員であった古岡英明先生が書かれたものによると、蓮如上人のおばさん(勝如/井波の瑞泉寺を復興した蓮如上人のおじの妻)の貢献が大きく、勝興寺の前身である土山御坊へ蓮如上人の子息を招いて住職に据え、土台を築いたそうです。

勝興寺は歴代、住職がいなくなると本願寺から入ってもらうなど、大谷家(本願寺門主の家号)と非常に強いつながりがありました。それを裏付けるに等しいことが5つあります。

1つめは、本願寺と同じ時期に報恩講を行ってきたこと。普通は門徒と一緒に本願寺に参らないといけません。2つめは、勝興寺の住職はいつでも(本願寺を)代行しておかみそり(帰敬式)を行い、法名を授けることが許されていたこと。そして、各寺は本尊・阿彌陀如来の立像が教義に照らして相応しいかどうかを本山に点検



岡西 法英さん
(浄土真宗本願寺派高岡教区
会議長 / 教願寺 住職)

してもらわなければ寺として認められません。ところが、呉西地区の寺はほとんど本山から来てもらった形跡がない。つまり勝興寺が代行して、よしとえばそれでよしだった。これが3つめです。4つめは、勝興寺を護持するためのお花講で、勝興寺の前住職のご絵像を飾り、前住職が書き遺したご消息(浄土真宗の教えの要を説き示したものを)を読み上げていました。通常は本願寺の門主(ご絵像やご消息)しか許されない特権ですが堂々とやって認められてきたことです。5つめは、そこにある納骨堂で分骨が行われてきたこと。これも本願寺と同格として扱われてきたことこの現れだと思います。

やがて加賀藩がこの勝興寺の支え手になります。前田家の親戚の娘を輿入れ(嫁に行くこと)したり藩主の息子が住職になったり。戦国時代の北陸は一向一揆によって100年間、武士を追い出して坊主と百姓で治めた時代です。その一揆の象徴が勝興寺であり瑞泉寺でした。様々な通達、監視・教育役を坊主たちに委ねる形で支配したことが、庶民文化が越中で栄えた理由のひとつであったと思われます。いちばんの基盤は庶民の力、押し上げであり、勝興寺は庶民の誇りでした。

明治27年、開基住職の600回忌法要が行われましたが、毎日5万人、10日でやめるつもりが延長して11日間で55万人が参りました。当時の富山県の人口は50万人いませんから、どれだけすごいことかわかります。越中庶民の誇り、それが勝興寺だったという証です。



橘 慶一郎 さん
(衆議院議員)

勝興寺の改修前の本堂で祖父と祖母の葬儀を営ませていただきました。人生で一泊だけここで寝かせてもらった思い出があります。お寺が動いている時は大変活力があります。みなさんの心の支えであると思います。お茶会や、子供たちが何かを学んだり、いろんな形でここで体験していただけるようになると建物にも良いし、お金をかけて直してきた意味もあります。伏木は港町であり交易が盛んで、北前船、けんか山などの祭り、廻船問屋の家がつながっています。海に向かって開かれている伏木なので、町の人にもいいし、来てもらった人にもいろいろと感じてもらえるのではないのでしょうか。広げていくと大伴家持や松尾芭蕉といるんな広がりが出てきます。この場所も「古国府」ということなので、ここに越中国府があったはずで、家持が万葉集を詠んでいたのでしょうか。地面を掘れば家持の木簡が出てくるかもしれません。いろいろな歴史の積み重ねが、地層のように積み上がって、そこに海、港というものがないまぜになって、それが伏木の良さだろうと思っています。是非ここに居る人たちにとっても、訪ねてくる人たちにとっても、勝興寺が良い存在になってほしいです。

新多 勇人 さん
(伏木商店連盟 専務理事)



伏木の港に外国船クルーズが来た時に、降りてくる乗客を誘って勝興寺を見学してもらい、お寿司を食べてひとり4,000円。伏木高校の生徒さんに手伝ってもらいながら20人くらいのバスできます。外国の方は瑞龍寺に行きたいと言っていました。工事中の勝興寺を見て喜んでもらえました。これからも外国船が入ってきた時に勝興寺を案内して広めていけたらと思っています。

報恩講には近隣の6町内から人を出してもらって、勝興寺のためにお手伝いしています。



追分 義留 さん
(勝興寺まちづくり協議会 会長)

本堂・本坊見学





第2部

第2部では、進行役より全国の寺院での活動事例を紹介。その後、勝興寺や伏木における今後の取組みの可能性や課題についての意見交換が行われました。



丸谷 芳正 さん
(吉久まちづくり推進協議会 会長)

人口減少、少子高齢化、宗教離れで全国のお寺が危機感を募らせていますが、そこで新しい試みが増えています。お寺での催しという写真やヨガが思い浮かびますが、音楽コンサートやマルシェ、謎解き脱出イベント、婚活イベント、プログラミング教室など時代に合わせて進化しています。常時ではありませんが時々開催されるイベントとしては、音楽コンサート、マルシェ、フェスなど。西本願寺では昨年12月に「ごえんさんエキスポ」を開催し、若い僧侶の方の活動を紹介するイベントで、2日間で約1万人の来場がありました。また、伝統的な法話、法要、花まつりもいろんな工夫をされています。商店街の中にあるクラブで法話をしたり、漫才やヒーローものの形式でしたり。現代版寺子屋

一昨年まで富山大学で教えていました。近年で東京に戻るところを、私は戻らない選択をしました。それは東京では味わえないいろんな良いものが残っていて驚いてしまったからです。家具デザインの工房として吉久の古い町並みのすぐそばの工場を借りました。地域の人とその古い町並みがなくなってしまうのを惜しんでいて、それをお手伝いし始めたのがきっかけです。東京では浅草や根津など下町に行かないとなかなか古いものはありませんが、高岡は本当に身近にあることに驚きました。吉久の米商の方は伏木に倉庫を持っていて、

「スクール・ナーランダ」では、音楽、科学、アートなど各分野の講師も招いて開催しています。

地域の大切な資産である勝興寺を私たち市民や住民と一緒に活用し、“活きた勝興寺”に。単に観光で賑わうのではなく、私たち一人ひとりが何かに使っていける、そんな場所になったらいいのではないのでしょうか。



林口 砂里
(有)エビファニーワークス 代表取締役)

渡船や木の橋で行き来していたそうです。吉久と伏木はつながりが強く、前々から伏木・勝興寺のことは気になっていました。勝興寺は「場の力」がすごいので、それを活かして地域活性につなげれば、本当の意味での“コミュニティセンター”になるのではないのでしょうか。課題は、協議会の高齢化。どうやって次の世代に文化や暮らし、地域の財産を遺して、あるいは活かし、伝えていくかです。伏木と吉久が連携して取り組んでいければいいなと思います。



牧野 友香 さん
(ふしき坂ノ上ヴィレッジ
運営委員会 代表)

勝興寺の坂道を降りたところの伏木気象資料館の隣の細長い土地に、コンテナハウスを活用してちょっとした村を作ろうと思っています。そのうちの3棟は飲食店や雑貨屋などのお店が入る予定です。私は「ムーンキャラバン」というカフェでランチの営業をしていますが、1週間に1回程度来る観光客から「伏木には歴史的なところが多くて見応えがあったが、ご飯を食べたりお土産を買うところがなくてちょっと寂しい」という話を聞き、どこかでおもしろいこ

とができるスペースがないかと考えたのがきっかけです。お店のひとつは「おべんとうカフェ」で日常に食べられるようなお弁当やお惣菜とコーヒーのお店、もうひとつは新湊で活動しているガラス作家さんの工房兼ショップで、子供達の製作体験もできるようになります。そのほかはコミュニティスペースやフリーマーケットが開催できる場所を設けています。

(平成30年)3月24日のオープンを目指しています。

観光に来たみなさんが帰られる時に「楽しかった」という言葉を聞くことを励みに活動しています。

私は特に観光に来た方の地域と何か少しでもつながりのあるような話をしています。例えばそこに「洛中洛外図」(レプリカ)がありますが、富山市の方が来られた時は「作者が狩野孝信あるいはその周辺の絵師と言われ、孝信ということをご存知ないかもしれないが、父親は狩野永徳で、

子は狩野探幽、奥さんは佐々成政の娘であったとも言われているんです」と話す。そうすると喜ばれます。東京から来られ方には「東京大学の赤門はウチらが造った」などと自慢します。観光ボランティアの「比奈の会」は、今16名在籍していますが、高齢化して長い距離を歩くことができなくなってきていることが課題です。



島 寿男 さん
(観光ボランティア「比奈の会」)

先ほど見学して「この松の間で何十回もお茶会したね」と話しながら回って来ました。茶会に関しては10月に裏千家の茶会もあると聞きましたし、これからどんどん大きく市民、県民の立場での茶会も開かれていくことでしょう。それにくっついて花展(お花)などいろんな文化芸術が生まれてくると思います。

女性の会での婦人会活動では、「伏木観光まつり」でうどん店のためにあの大きいかまどで何杯もの出汁を作ってくれた諸先輩がたのおかげで、今でもそのうどん店を続けることができます。もし修理後のかまどで出汁作りができたら勝興寺の道筋を利用した観光まつりも復活できるのではないのでしょうか。そうすれば若い世代との連携もできて良いと思いました。



辻 やす子 さん
(ふしき女性の会「鈴」会長)

本校は県内で唯一「国際交流課」という学科をもっていて、生徒は英語のほかには中国語、ロシア語、韓国語を学んで、それぞれ選択した国の友好校へ語学研修に行くという授業をもっています。伏木に豪華客船やクルーズ船が来ると、通訳

今度の6月17日(日)に勝興寺で開催される読売新聞社主催の「読売茶会」を担当しています。母が藪内流の茶道をしていてその手伝いをしていますが、藪内流の家元は西本願寺から徒歩2分の門前町にあり縁が深いです。千利休と兄弟弟子だった流祖・藪内剣仲の子・2代目が西本願寺から寺領を拝領し、それからずっと藪内流は西本願寺の茶道師家としてお茶を司っています。いつも通っている阿弥陀堂と同じ雰囲気勝興寺で藪内流が行われてきたということがお点前に通じるところもあるのだと思います。この場に相応しいお茶ができれば良いですね。



小久保 瑛子 さん
(古儀茶道藪内流)

宮岸 毅 さん
(富山県立伏木高等学校 校長)

ボランティアで学生を派遣しています。万葉の衣装を着ていくと外国の方が興味を持ってくれて会話がはずみますよ。通訳ボランティアでまた勝興寺へ来たりと、高校として貢献できればと思います。



幸い勝興寺は公共交通機関からも非常に近いので、勝興寺をキーにして外国の方に向けて紹介するインバウンド(訪日外国人旅行)をやっていくと、伏木高校のボランティアのみなさんも活躍できると思いました。ボランティアガイド(比奈の会)の方が高齢化しているという課題があるとお聞きしましたが、先ほどのエピソードはとても楽しく感じたので、例えば若い人向けの講座をしていただくのはどうでしょうか。



萩布 彦 さん
(富山県国際課長)

今日こうして大勢の方々に勝興寺をなんとかしようという気持ちで聞いていただいたのは本当に有難いことです。伏木の方々がアイデアを出して、使えるものはなんでも使って盛り上げていただきたいと思います。



沼田 平昌 さん
(宗教法人勝興寺
代表役員)

今日は密度の濃い、大変楽しみな話をたくさん伺うことができました。勝興寺は大変な資産です。それは単に重要文化財だということではなく、そこに染み込んでいる精神文化というものがああります。ここでたくさんの方々が学んだり、あるいは人生と、生死と向き合うということを重ねてきて今日に至っています。お寺にはいろんな要素が盛り込まれていて、これをまた現代に引き直す。まさに原点回帰ということが宗教、お寺の世界でも行われているのだと思います。

お寺を訪ねる方をおもてなしするという門前町、門前市というのが町の起源のひとつ。元々のものを今にもう一度呼び起こして、それにどういうものを付け加えたらお寺も町も元気になっていくか、そういったことを考える良い機会になったのではないのでしょうか。いろんな事

例や取り組みを共有することができて、それがヒントになり、結びつきができていくきっかけができたような気がします。

今年是一部公開、全体公開には2年ほどかかりますが待っていることはないわけで、今年からできることをまず始めていきましょう。

この地は現代に至るまで長い歴史、時間の軸でつながっています。立山連峰や富山湾を見晴らせる空間的にも大変素晴らしい、有難い場所です。地域の大切な資産である勝興寺を大事にし、楽しみな“種”がたくさんありますので、これから大きく目を出し、開かせていきたいと思えます。

高橋 正樹
(高岡市長)



～ 座談会を終えて ～

今回の座談会で、改めて勝興寺のことについて多くのことを知ることができました。

私たちはこれから右肩上がりの成長は期待できないかもしれませんが、心の糧を得て豊かに暮らしていけるような生活を目指していく時に、勝興寺や伏木はそれに大きく寄与できるものを持っていると感じています。また、いくつか課題もあがっています。それをどう解決していくか。この日に

お聞きしたお話だけでも「ここここはつながるな」と思う部分があったと思います。是非そういったことをみなさん同士で連携し、それからまた一緒に盛り上げていきたいと考えています。

この会は今回が第1回目ということで、今後さらに、具体的に「こういうことをやっぺいこう」というような話し合いを重ね、実際に実行に移すまで続けたいと考えていますので、ご興味のある方は今後も是非ご参加いただけたら幸いです。

主催：高岡市歴史文化推進協議会
共催：高岡市／高岡市教育委員会
後援：富山県／近世高岡の文化遺産を愛する会

<お問い合わせ>
高岡市歴史文化推進協議会
(高岡市教育委員会生涯学習・文化財課内)
TEL 0766-20-1453